# 十文字
Jumonji

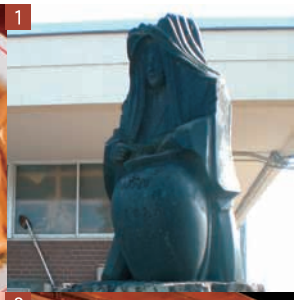
皆瀬川に白鳥が飛来する頃、冬の訪れを感じる十文字。
町の境を通る川は、群れをなして旅を続けてきた白鳥たちが春までの間羽をおろす場所となります。そして白鳥たちがまた北へと旅立つ頃、里には様々な農作物が芽吹き出すのです。
甘く酸っぱいさくらんぼの果実が真っ赤になる6月には、まるで木々に赤色のイルミネーションが灯ったような風景が広がります。

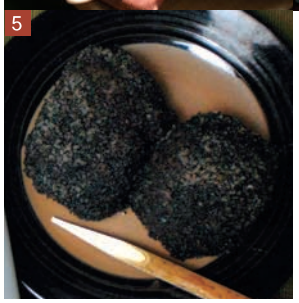
## 白鳥が舞う、さくらんぼの里

十文字は、その昔何もない平地でした。田畑の広がる大地に横手―湯沢間の道路と増田―浅舞間の道路が十字に交差している、そんな場所だったのです。何も目印がない平野では、思う方向と違う場所へ迷う旅人も後を絶たなかったといいます。そのため何か目印にと建てられたのが猩々（しょうじょう）像です。町のシンボルとして十文字の駅前にあるのが二代目になります。道に迷う人が絶えなかったことで、「いたずらたぬき」のせいではないかと言われていました。

昭和10年頃、あっさりとした醤油スープに細いちぢれ麺が特徴の十文字の中華そばが誕生しました。当時は重労働も多かったため、あっさりとしたスープのラーメンはおやつがわりに食べられることもあったと言います。町民に愛されるラーメンが今はイベントでも活躍し、十文字地域の様々なイベントで、餅まきならぬラーメンまきが行われます。『猩々祭り』では猩々に扮して袋入りのラーメンがまかれ、参加者の頭上をラーメンが飛び交います。

油揚げにもち米を入れて醤油味に煮つける油揚げまんまは十文字に伝わる家庭の味。商店街には餅菓子を作る店もあり、『いもや』もその一つでした。名物よぐたがれはあんこ餅も食べたいけどごま餅も食べたいというよくたがれ（欲張り）な人に、と作られたもの。餅をあんこで包み、さらに黒ゴマをまぶしたもので、小さい頃から親しんできた味として今も人気です。





1. 猩々像
2. 十文字の中華そば
3. ラーメンまき
4. 油揚げまんま
5. よくたがれ

ちょっとより道

### 道の駅十文字 まめでらが

道の駅十文字の直売フロアには地元の味を求めて立ち寄る人や、安心・安全な食材を求める人が多数訪れ毎日賑わっています。他品種栽培やハウス栽培に取り組む農家の努力で野菜や果物の種類も多く、雪国でありながら一年を通して新鮮な農作物が豊富なことも特徴です。

地元の野菜や果物を利用した手造りのお惣菜やお菓子なども人気で、季節によって商品が新しく変わり訪れる人を楽しませてくれます。家庭料理の「油揚げまんま」や、いもやの「よぐたがれ」もここで扱っています。